

すべてのがん病巣は、遺伝子の突然変異によって生まれるたった一つの不死細胞から始まります。分裂を繰り返しながら徐々に大きくなっていき、やがて基底膜という障壁を突破して自分が生まれた臓器の内部に次第に広がっていき「浸潤」が起こります。私のようながんの専門医でも、1センチにならないとがん

## がん社会 を診る

中川 恵一

と診断できませんが、それまでには10〜30年の歳月が必要です。しかし、1センチになったがんが5センチになるのは数年しかかかりません。

がんの病巣が大きくなると、内部には血液が行き渡らなくなるため、栄養不足に陥ります。そこで、がん細胞は、新天地を求めて血液の大海原に乗り出し、別の臓器に転移

## 鳥かごにいるうちに



イラスト・中村 久美

します。こうなると、完治の可能性はほぼなくなり、がん細胞が浸潤や転移といった特別な能力を獲得するためには、多くの遺伝子の変異が必要で、がんは時間とともに悪性を徐々に高めていきます。

早期のがんの治療は、鳥かごの中の鳥を捕まえるようなもので、比較的簡単だといえます。リンパ節にまで転移したような、ある程度進行したがんは、鳥が鳥かごから出て部屋の中を飛び回っているようなものです。鳥かごに入っているときよりは大変ですが、がんばれば捕まえられます。

転移したがんは、鳥が部屋窓から外に出て行った状況に似ています。こうなると鳥を捕まえることは難しくなります。それでも、たまたま鳥が部屋に戻ってくる可能性はゼロではありません。気がついたら、鳥が自ら、かごのなかに入っていることもあり得ないとはいえないでしょう。

これが、末期がんからの奇跡の生還です。がんが治るかどうかは結局、確率的なものです。奇跡はつねに起こり得ます。その点では大逆転の希望はいつもありますが、外に出て行った鳥が、かごに戻ってくるような大逆転は、望んで得られるものではありません。

診断可能な早期がんは、簡単にいえば、1〜2センチの病巣のことで、この時期に治療すれば、9割以上治ります。がんがこの大きさにとどまっている時間はおおむね1〜2年ですが、このサイズでは症状は出ませんから、1〜2年に一度の検診が必要になるのです。(東京大学病院准教授)